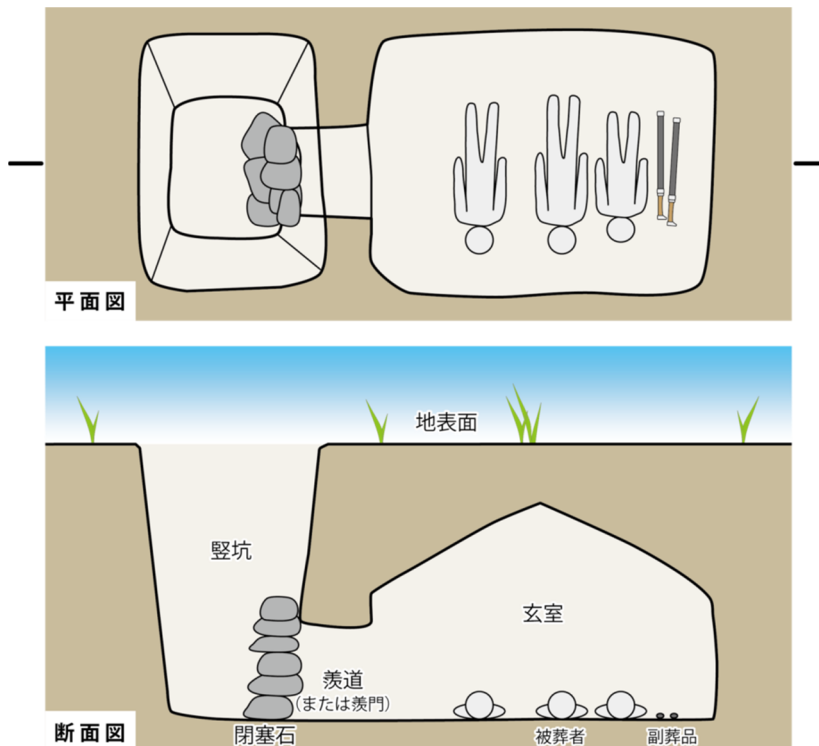


## はじめに

地下式横穴墓という墓制がある。南九州特有で肝付からえびの・宮崎・高鍋の東南九州・大隅にのみ存在するとされている。築造年代は、AD400 年から 650 年のほぼ 250 年間とされている。前方後円墳は AD250 年頃からで、薄葬令によって 650 年ごろに終了している。地下式横穴墓は前方後円墳より遅れて作られ始めたが、それからは同時並行して作られ、同時期に終わったように思われる。

形式は、平地に 3 メートル位の縦穴を掘りそこから横穴を穿っている。下図参照



えびの市で多数検出されているため、えびのが始点とされていたが、最古と思われる地下式横穴墓が宮崎平野で検出された。また、肝付でも最古を自称する地下式横穴墓が検出されている。

## ○y 染色体ハプログループ

遺伝子の研究が進み、父親の更に父親の・・・・・・更に父親の遺伝子をたどることができるようになった。遺伝子のパターンをグループ化して、調査すると、どのグループに父系の先祖が所属するかがわかる。統計調査をすると、例えば日本人の先祖のグループの配分比率がわかる。C・D の縄文系、O1b2 北上江南稲作系、O2 漢民族系の混血比率がわかるのである。国際比較をすれば、民族の移動の歴史がわかるのである。資料として、“日本人および周辺の諸民族の Y 染色体ハプログループの割合”を付けているので参照していただきたい。

## ○遺伝子の流れ

日本列島には縄文人が住んでおり、そこに揚子江中下流域で稲作をやっていた人々が黄海を渡りあるいは韓半島を経由してやってきた。水田に適した湿地帯を求めてのことであろう

か。紀元前800年くらいのことであったという。当時としては、とても実入りいいビジネスで徐々に日本中に広まっていった。次に、始皇帝の秦が滅びると、戦乱を避けもしくは戦乱に追われ漢民族が韓半島を経由し次第に日本列島にやってきた。紀元前200年頃からである。つまり、縄文人に稲作民が混血し、次に漢民族が混血していったのである。アイヌの人たちは、混血せずに縄文人の遺伝子を保存していることになる。沖縄の人たちは、地理的要因で稲作民や漢民族の混入が少ないようである。台湾に近い八重山諸島では、元々の縄文人の要素がないようである。

## 南九州地方以外の地下式横穴墓

### ○門前の地下式横穴

公開日 2014年1月1日



**地域** 下南地域

**名称** 門前の地下式横穴（もんぜのちかしきよこあな）

**所在** 臼杵市大字前田

**備考** 昭和55年6月調べ

門前地区から水ヶ城のテレビ中継所まで通じている坂道を三百メートルほど登っていくと、道の右手に石柱の柵で囲まれたところがあります。入り口がふさがれているため穴の内部を見ることはできませんが、この柵の内側に地下式横穴と呼ばれる埋葬用の遺構があります。

このほか、深田や井村地区などでも同じような地下式の横穴が、あわせて五基ほど発見されています。このような遺構は、地上に何らかの標識を持っているわけではなく、地中に残っているため、開墾や造成工事などの際に横穴の天井部分などが陥没して、偶然に発見されることがしばしばです。

これらの地下式横穴は、古墳時代（今からおよそ千七百年から千四百年前）の竪穴式石室、横穴式石室などから派生した、古墳時代から室町時代にかけての埋葬施設といわれています。市内でも限られた地域しか発見されておらず、数も少ないことから、特殊な墓の形態といえるでしょう。

門前の地下式横穴は、地表から平面が方形をしている竪穴を、垂直に約百二十五センチ下がる、そこから玄室（遺骸を納める部屋）と呼ばれる奥行き百七十五センチ、横幅二百八十センチ、高さ九十五センチの比較的広い横穴が掘られています。玄室内から副葬品などは出土していません。

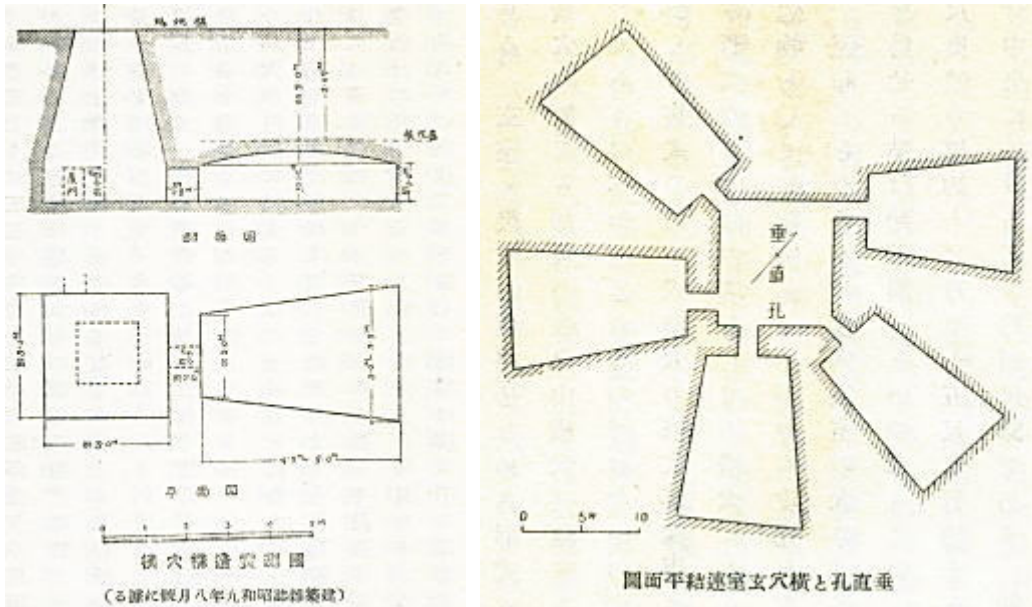
市内に存在している地下式横穴のうち、地表から内部を観察できるものとして深田所在の小五

郎地下式横穴があります。

※ 門前の地下式横穴は、昭和五十三年四月八日に市の史跡に指定されています。(H14.10月加筆修正)

### ○東京お茶の水の地下式横穴墓

上田は同研究所の名義で、1943年(昭和18)に詳細な報告書『東京御茶水に於て発見せる地下式横穴の研究』を発行することになる。余談だが、目白3丁目3534番地は現在の目白幼稚園の北側あたり、山手線沿いにふられた当時の地番だ。



では、上田三平の同報告書から、古墳が発見された概要を引用してみよう。

(前略)その工事中の四月廿六日に根伐の底部に於て偶然不思議の洞穴を掘り当て、更に引き続いて他の場所に於てもトラックの車輪の陥落等によつて略同様の洞穴の存在せることを発見した。よつて現場監督員は、直ちに各々の洞穴の内部を仔細に点検し、その形状を測定したが、此等の洞穴は何れも予め十分な意図を以て設計され、その技術に於ても共通せる点があつて全く人工的なものであることを確め得たのである。／而してその一組と認められる形態は、地表から垂直に穿たれた深さ十二三尺の方形の孔を中心とし、その底部の周囲に於て数個の通路の如き穴を穿ち、それから矢車状に配置された四室若しくは五室に連続せることを発見したのである。その後も根伐工事の進捗に伴ひ、略同様の洞穴の集団が発見され益々その数を増加したが、この不思議な事実が遂に現場から文部省の専門学務局に伝へられ、鶴岡主任は之が調査を史蹟調査室の吾々に懇請(しょうよう)されたのである。

### ○中国古代の地下式横穴墓(土洞墓)

土洞墓(読み) どうどうぼ(英語表記) tu-dong-mu

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説

中国の墓の一種。地表から垂直に掘下げた墓道と、その下端から横に水平に掘込んだ墓室から成る単純な構造の墓である。墓室内にはなんらの施設も造らないものと、空心 磚で棺槨を造るものがある。戦国時代から前漢代にかけて流行した。

古代中国における下級墓葬について(一) 町田章 史泉でも述べられている。

南九州特有と言われた地下式横穴墓が、意外に大分や東京で、また中国古代の漢でも発見

されている。ということは、漢の墓制が回りまわって南九州にやってきたことになる。関東にも大分にも。

ちなみに、地下式横穴墓を考えると、少なくとも湿地帯では成立しない。穴が変形ひしゃげてしまうからである。また、雨量の多い地域では縦穴が埋まってしまうため成立しない。南九州の地下式横穴墓の多くは、梅雨時に縦穴に雨水が浸水し横穴にも雨水が侵入したものである。また、灌漑技術の進展とともに表土が水田化したものは、水没したものである。また、一回の洪水で水没し失われたものも多いだろう。比較的乾燥がよく、地盤のしっかりした所の地下式横穴墓が現在まで残り検出されているものと思われる。畑を耕していた時、耕運機が陥没したり、あるいは棺を掘り当てたとかいう話の多くは、地下式横穴墓を掘り当てたものである。

これらのことから、地下式横穴墓の発想は、江南地方をルーツとする稲作民ではなく、華北をルーツとする漢民族の発想と思われる。土洞墓（地下式横穴墓）が漢の墓制であることが納得できる。ただし、漢の土洞墓と南九州の地下式横穴墓には600年ほどの時間差がある。

## 持込んだ渡来人は誰なのか

AD400年ごろから、地下式横穴墓が南九州で作られ始めたことからして、このころの渡来人はどこから来たのかということになる。年代的に、応神天皇が実在しているとすればこの時代で、韓国からの渡来の第一波である。その5~60年くらい後が第二波で今来のアヤ人といわれる頃になる。第一波は高句麗の好太王が新羅に南進進攻した時で、半島の南部・南西部は混乱しており、そこからの渡来であろう。また、百済がAD350年ころ成立したように書かれていたが、どうも実際には南西部は馬韓のまま、百済が南進しておりここも混乱状態であっただろう。

この時代は、記録上、馬韓は百済に統一されたようになっているが、未統一地域として半島南西部が残っており、倭の五王はここを多分親愛の情を込めて慕韓と呼んでいたようである。そのためか、この地域に前方後円墳が作られている。王仁吉士は百済より献上されたように書かれているが、出身地は慕韓の地域のようなのだ。

朝鮮半島南部・南西部は好太王の南進や百済統一の余波で混乱しており、第一波の渡来人として北九州・畿内そして南九州南東部にやってきたように思う。南九州南東部にやってきた者たちは、志布志に上陸し在地豪族と共存しながら、都城やえびのへ進出していたのだろう。この地の地下式横穴墓から、半島南西部・南部の鉄製品が出土している。宮崎平野に上陸した者は、大淀川水系から一ツ瀬川水系へと進出していたのだろう。地下式横穴墓が南九州で作られ始めた時期に大きな差はないようである。文化として伝播したのではなく、人の移住によって生活習慣として比較的短期間に持ち込まれたからであろう。

地下式横穴墓の副葬品として、武具がよく出てくる。異形の剣や短甲である。短甲に関しては、韓半島南部・南西部とヤマトに差がないため、鉄材の産地を特定すればいいように思うが、この時期ヤマトは鉄材を韓半島からの輸入に頼っていたため、判別しにくい。高句麗の鎧はケイ甲となってタイプが短甲とは異なる。

## 串間より出土した玉璧は誰がいつ冊封され、いつ持ち込んだのか

江戸末期の百姓佐吉が、串間の穂佐ヶ原で畑を耕しているときに、石棺を掘り当てその中から玉璧を取り出したと記録されている。地下式横穴墓の上を耕しているとき陥没し発見したものである。南越王が同等の玉璧を与えられているが、古代にそれほどの国が串間にあったとは思えない。志布志は肝属水系に水田が広がるが、広さは限定的である。古代の志布志・串間に南越国に匹敵する大きな国があって、冊封されたと考えるより持ち込んだと考えるべきだろう。また、貴重な骨董品として入手した物なら、死亡と同時に副葬することはなく末代に伝えるだろう。となると地下式横穴墓を持ち込んだ渡来人が玉璧も持ち込んだのではないかと考える。

冊封されて玉璧を貰ったのは誰だろうか。朝鮮は、漢時代以降は箕氏朝鮮・衛氏朝鮮がある。衛氏朝鮮は滅びた。箕氏朝鮮は衛氏朝鮮に滅ぼされたのだが、そのあと馬韓をせめて馬韓の王になったという伝説がある。箕氏朝鮮が、漢の冊封を受け玉璧を得、衛氏に滅ぼされたのち、馬韓にて再興し、百済の南進に耐えられず、日本列島に逃げ出し渡来人として南九州に現れたと考えることもできなくはない。王統の証明として玉璧を保持し続けていたのだろうか。ではなぜ AD400 年から AD600 年頃になって、地下式横穴墓に副葬したのだろうか。王統の証明が不必要になったということだろうか。

南九州には、神武東征の伝説が多数残っている。稲作民であるなら、徐々に水田を求めて北上していくのだろうが、一挙に畿内に行っている。しかも天下を治めるために。武人の発想と言わねばならない。武人がまとまって渡来したとなると AD400 年頃となる。神武東征伝説は、AD400 年頃の、南九州の渡来人が在地豪族と共存しながら、北九州の渡来人と呼応しながら畿内に進出し在地豪族と混血しながら、あるいは反目しながら更なる渡来人を呼び込み勢力を拡大していったのではないかと考える。その過程を神話化したものが、神武東征神話ではないだろうか。記紀には神武天皇・崇神天皇・応神天皇として書かれているのかもしれないが、実際は南九州に渡来した者の一部が、しかもそれほど血なまぐさい戦など起こさずに畿内に進出し勢力を確定していったものと思う。

それからの時代は、倭の五王の時代である。渡来系の遺伝子の濃い状態であっただろう。五王は、賛・珍・齊・興・武と中国風の名前で南宋に朝貢している。馬韓の王統であるなら十分考えられることである。しばらくして、継体天皇が皇位を継いだ。それまでの系統からは大きく変わった天皇である。ここで、慕韓の記憶が意味を失い、記紀からも失われていったのかもしれない。記紀には渡来人は百済より来たとされている。

それから 300 年ほど経って、百済滅亡の折、大勢の百済人が日本に亡命してきた。百済は支配層と被支配層では言葉が違っていたという。王のことを被支配層（馬韓系と思われる）はコニキシ、支配層はオラクと言ったという。百済は高句麗から分岐したと言われているため、支配層の言葉は高句麗系の言葉であったのではないかと考える。亡命者の多くは支配層であり、オラクという言葉が多く使っていたのではないかと考えるが、ヤマト王権はコニキシという言葉で称号を贈った。ヤマト王権では、馬韓語のバイアスがかかっていたものと思う。

この件に関しては、馬韓も九州も江南稲作民が水田を求めて移住してきており、当時は言語的共通性があったのかもしれない。江南稲作民の言葉は、オウストロアジア語であるが、馬韓や九州に上陸して在地語と混交しながら変容し、現在はオウストロアジア語と言われることはないが、当時は、古い形を残していたのかもしれない。

倭の五王は、南宋に冊封され、当時国際的に倭王として認められたのだから、王統を証明

する玉壁はこの時不要になったのではなかろうか。

神武天皇の父親ウガヤフキアエズの命のお墓・吾平山上陵と、玉壁の見つかった穂佐ヶ原とは約40Kmの距離である。

## おわりに

南九州特有と言われていた地下式横穴墓も、戦中戦後の資料を見ると、いろんなところで検出されている。発生の始点は、地盤のしっかりした乾燥地帯でなければならない。華北の漢民族でほぼ間違いないであろう。それがどういうルートで南九州に持ち込まれたのか。大隅の地下式横穴墓で半島南部・南西部の武具が副葬されていることから、そこから持ち込まれたと考えるのは自然であろう。時期的にも第一波の渡来人の時期AD400年ごろに重なる。

しかし今のところ、韓半島に明確な地下式横穴墓の検出はない。半島南部や日本は雨や台風が多く、この墓制は気候風土的にミスマッチで、かなりのものが失われてしまっているだろう。水害や大雨で、畑の水田化で失なわれただろう。本来高台の平地に作られていただろう。ここは宅地としても望ましく、いつの間にか気づかぬうちに単なる地中の空洞として埋め戻され市街地化していったものとおもう。

南九州からの東征の話は、半分は筆者の期待値である。玉壁に関しては大半は筆者の期待値である。今後少しずつ研究を深めていきたい。